

ヨットが 呑まれた

朝日新聞社会部「いのちの海」取材班



朝日新聞社

News & Documents
NID Books

ヨットが 吞まれた

朝日新聞社会部「いのちの海」取材班

News & Documents

ND
Books

朝日新聞社

News & Documents **ND**Books

ヨットが呑まれた

1993年6月5日 第1刷

著者——朝日新聞社会部「いのちの海」取材班

発行者——天羽直之

発行所——朝日新聞社

〒104-11 東京都中央区築地5-3-2

電話 03-3545-0131 (大代表)

編集・書籍第一編集室 販売・出版販売部

振替 (東京) 0-1730

印刷所——凸版印刷株式会社

© Asahi Shimbun 1993

ISBN4-02-256542-X Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。

目次

第一章

5

出港

7

転覆

15

第二章

33

漂流

35

救助

52

第三章

61

搜索

63

第四章

93

病院

95

第五章

マリンマリン
119

第六章

残された人々
153

第七章

明日への伝言
169

ドキュメント
181

あとがき
188

167

151

117

装丁／道吉 剛・米倉英弘

ヨットが呑まれた

第一章

出 港

【出航準備】

一九九一年十二月二十八日、「トーヨコカップ ジャパン↓グアムヨットレース'92」に参加していた「たか」号は、発達しながら北東に進む低気圧の中にあった。

佐野三治さん（三三）たち七人の「たか」乗組員は、台風並みの強風と、高さ四メートル以上の波にもまれていた。

「冬」が本格的な「厳冬」に切り替わるとき、毎年のように、日本の南海上は低気圧の通過に伴い、三、四日続く大時化^{しどけ}に見舞われる。二十八日はその二日目に当たっていた。

「グアムレース参加ヨット各局、こちら三崎ヨット。ヨット『たか』感度ありますか」
「感度あります。どーぞ」

この日午前零時、レースの主催者である日本外洋帆走協会（NORC）の三崎ヨット無線局（神奈川県三浦市）への定時連絡に、「たか」は現在位置を伝えてきた。

北緯三一度五一分、東經一四〇度三八分、青ヶ島南東沖だった。

この時、「たか」は、強風のため一〇センチほどの裂け目ができたメインセイルを降ろし、一時的な漂流状態にあったが、そのことを定時連絡では伝えなかった。「まだレースを続けるつもりだったので、そのときは特別に何も思わなかった」と佐野さんは話す。

三崎ヨット局に詰めていたNORC通信委員長代理、中上川貞次郎^{なみがわ}さんは参加各艇の現在地を次々と確認したあと、前日の午後四時十五分に「マリンマリン」の乗組員一人が海に転落した事故を伝えた。

「原則的には二次遭難を避けるため、レースを続行して下さい。救助に向かう船は安全を確保したうえで、艇長判断で向かうよう要請します」

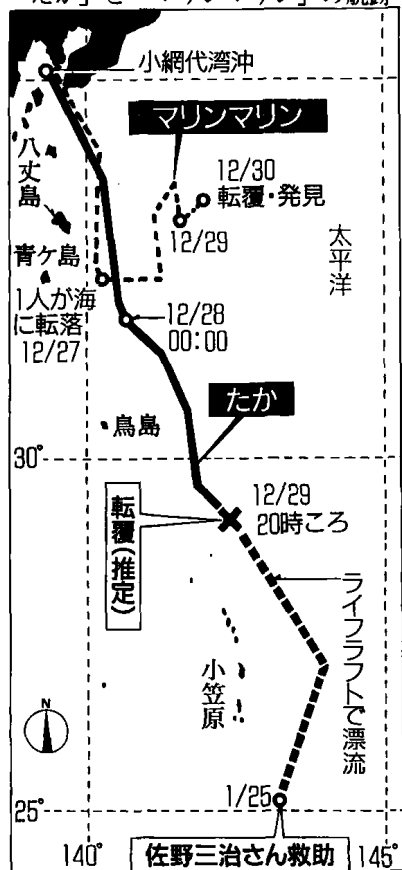
参加九隻のうち「ハーftime」は、中上川さんがいくら呼んでも応答がなかった。「キティ」はマストが折れ、「コンテッサX」はメインセイルを破損して、すでに二十七日午後、レースを棄権していた。

「たか」は二十七日午後三時ごろ、破れたメインセイルを降ろす作業中の「コンテッサX」とすれ違っていた。「キティ」のマストが折れたことは、二十八日午前零時の定時連絡で知った。

「電柱のようなマストだったのに。すごいなあ」と佐野さんは思った。

二十六日のスタートの直前まで、「たか」は出航準備に追われていた。

「たか」と「マリンマリン」の航跡



91年12月26日 参加9隻、小網代湾沖をスタート。

27日 「マリンマリン」で1人海に落ちる事故発生。

29日 正午ごろ、「父島の北方を航行中」と「たか」から最後の無線連絡。午後8時ごろ、転覆。1人死亡、6人はライフラフト(救命いかだ)に移る。

30日 「マリンマリン」転覆、転落した1人を含め4人死亡、4人不明、久保田修央さん(25)救助。

92年1月6日 主催者からの要請で第3管区海上保安本部が「たか」の捜索開始、対策本部を設置。

9日 午前8時15分ごろと9時15分ごろの2回、捜索機が上空に見えた、と佐野三治さんという。発見はされず。

10日 1人死亡。

11日 3人死亡。

16日 1人死亡。3管が対策本部を解散、事実上捜索打ち切り。

25日 航行中の英国貨物船が漂流していた佐野さんを発見、救助。

燃料タンクの増設や、無線の台の納入を請け負った地元のボート業者、山下八平さん（六四）が「お前ら、まだこんなことやっているのか。グアムレースを甘くみたら大変だぞ」と佐野さんに声をかけた。

山下さんによると、レースに出るヨットは通常夏ごろからは準備を始めるという。「たか」が本格的な準備のための改造を始めたのは十二月十日以降だ、と出航準備に携わった荒昭弘さん（四七）は話す。

無線にしても、十五日にNORCが定時連絡用のSSB（短波帯）の試験電波交信をした際、電波の発信が弱く、「たか」からの声は二、三〇〇メートルしか離れていない相手の無線機にもうまく伝わらなかった。無線機本体とアンテナをつなぐコントロールの部分の接続ができていなかったため、調整は出港前日までなかった。参加に必要なイーパープ（緊急時位置指示発信機）を受け取ったのは二十二日だったという。

「たか」は無線機やイーパープを積むのに必要な船舶局の免許を取得していなかったことも、事故後、郵政省の調べで分かった。

二十六日、日本周辺の天気は下り坂で、東京に初雪が降った。スタート地点の神奈川県・小網代湾沖は、霧のような深いもやが立ち込めていた。海水の温度と気温が大きく隔たっていたため、水蒸気が急速に冷やされて起こる現象だった。

参加艇のひとつ、「摩利支天」の羽柴宏次艇長は二十五日に天気予報を聞いて「明日は中止だ」と考えていた。

出港を見送りに来た、元漁師のヨットクラブ社長は「八丈島あたりで低気圧とぶつかる。もう一日スタートを待ったら」とクラブに所属するヨットに忠告した。

二十七日の朝、気象庁は「今夜から明日にかけ、日本近海は低気圧の急激な発達で海、山は大荒れとなる見込みです」という低気圧に関する情報第一号を出した。

悪天候や「マリンマリン」の事故発生などから、横須賀海上保安部は二十七日午後四時二十分、NORCの相馬雅利事務局長に電話をかけた。

「落水者やマストを折る船もでるほど、海上も風が出てきた。レースの中止について検討されてみたらいかがか」

相馬事務局長は「内部で検討してみます」と答えた。

連絡がなかったので一〇分後、再び海上保安部が電話をかけた。

「話し合いの結果はどうだったでしょうか」

「『キティ』は八丈島に無事向かっている。『マリンマリン』については、付近の参加艇で搜索します。レースはこのまま続けます」

横須賀海保によると、港内や内海と違って外洋の場合、中止を命じる法的根拠はない、という。

NORCは、この海保からの中止要請を参加艇には伝えていない。「国際ヨット競技規則の第一章、基本原則の項に、ヨットの責任、として明記があります。『スタートするかしないか、またはレースを継続するかしないかを決めるのは、各ヨット独自の責任である』。これはヨット乗りの憲法なのです」と、相馬事務局長はいう。

「ハーftime」との無線連絡がなくなっていたことも、「情報は全部の艇に平等に伝える」という原則に反する、という判断がNORCにはあった。

【心の準備か、船の準備か】

「たか」が大波と苦闘しているころ、乗組員の家族たちは、順調に帆走しているものと思っていた。

「おせち料理は残しておいてよ」といつていた高瀬恒夫さん（当時二六）は、出港前日の二十五日朝、「早いし、飯はいらないよ」とお茶だけ飲んで、母親の寿子さん（五七）に笑顔で片手を挙げ、東京都小金井市の自宅を出た。

橋本定文さん（当時四二）方では、クリスマス・イブの二十四日が、長男雅之君の六歳の誕生日だった。翌朝、毎月のようにレースに出ている橋本さんは、いつものように「行ってくるよ」とだけ言って出発した。

武市俊さん（当時五八）にとっても、グアムレースは特別なことではなかった。

「じゃあね」

「いつていらっしやい。気をつけて。いつ帰ってくるの」と、妻の千鶴子さん（五八）は送り出した。

鍋島博之さん（当時三二）は前年の秋、グアムレースに出ることを富山県入善町の実家に電話で告げた。

「そんな遠いところへ行つて、途中なにかあつたらどないすんがか」と心配する母京子さん（五八）に、「絶対大丈夫。これまでグアムレースでそんな事故が起こったためしはないよ。正月の一日か二日にグアムから電話するから、家にいらっしやい。待つとらっしやい」と笑つて言つた。二十五日、鍋島さんは逗子市の下宿から「やつと準備が終わった。明日行くから」と最後の電話をかけた。

緒形稔さん（当時三三）は、遺品の一つとなつた合羽かっぱを二十二日に母親の春子さん（五七）に着てみせた。裏地は黄色の蛍光色だった。

「ずいぶん派手じゃないの」という春子さんに「これくらい派手じゃないとだめなんだよ」といつた。二十五日、春子さんが「天候も悪いし、大丈夫なの」と声をかけると、緒形さんは「ヨツトは転覆したつてすぐ復元するんだから大丈夫」と言つて出かけた。

その日の夜、佐野さんは高校時代のヨット乗りの友人に電話をかけた。

「準備ができていない。あまり気乗りがしないんだ」

友人は「心の準備か、船の準備か」と聞いた。

佐野さんは「両方だ」と答えた。

冬の日本を脱出し、南の島で正月を迎えるグアムレースは、七回目の開催だった。日本から出発するヨットレースとしては最も距離が長く、ヨットマンたちのあこがれでもあった。ヨット専門誌は「トロピカルセーリング」とうたい、かつては家族連れでの参加もあった。

二十六日、高瀬さんの母寿子さんは、息子の「スタートはおもしろいよ」という言葉に誘われてスタート地点の油壺のヨットクラブを訪れた。少し遅れて着いたので、「たか」を見つけることはできなかった。

「海が荒れている」と思った。

そのレースで「外洋ヨットは不沈不転」というヨット界の常識が覆され、十四ものちが海にのまれるとは、だれも思っていなかった。